

11 月 10 日開催

ブタから見た中国古代の歴史と環境

前期博士課程2年 益満義裕

「ブタ」という言葉から何を連想するであろうか。「ブタに真珠」「ブタ箱」など、あまり芳しくないものが多い。日本人が一年間で消費する肉の中で最大の約三分の一を占めるのがブタ肉である。ビタミンB1の含有量も多く、家畜としてはこれほど肉効率のよいものもない。このようなブタから歴史と環境を読みとることはできないだろうか、というのが今回の発表の目的である。

ブタについて論じる前にまずブタとは何かということを定義しなくてはならない。ブタとはずばり、野生のイノシシを家畜化したものである。ではイノシシとブタにはどのような相違点があるか。イノシシからブタに変化するにあたってさまざまな性質の変化がある。第一に毛色。イノシシはほぼ褐色であるのに対して、ブタは白色・赤色・灰色など多様化している。次に頭骨。ブタは下顎骨が短縮してしゃくれた顔になる。これは咀嚼力が衰えるからである。三番目に体形。ブタは産肉能力が向上するためいわゆる下半身に多くの肉がつくようになる。四つ目は発育。体重九〇kgに到達するまでに、イノシシが一年以上かかるのに対してブタ(ランドレース種)は六ヶ月以内で到達する。五個目は繁殖力。産仔数がイノシシは平均五頭であるのに対して、ブタは平均一〇頭以上である。最後が自己防衛力。家畜化されることによって危機感がなくなるということで、犬歯が退化したり耳が垂れたりする現象である。尻尾が巻くのもこの要因である。

次に家畜におけるブタの特殊性を認識しなければならない。古代中国では「六畜」と称される家畜が有名であった。それは馬牛羊鶏犬とブタであった。この中でブタは利用方法が少ないという理由で特殊である。犬は番犬になるし、狩りにも使える。鶏は

目覚し時計代わりになるし、卵を提供する。牛や馬は言うに及ばず、羊は毛を提供する。ところがブタは肉以外に産出するものがないのである。ではなぜブタは重宝されたのであろうか。これはブタが雑食性であることが大きな要因である。つまり穀物以外に人間の食べ残しや、果てには糞尿まで平気で食するといった、悪環境に耐えうる順応性がブタを家畜ベスト6に選ばせたのである。

また、家畜を飼うことに関して経済的に考えれば、家畜は農耕に比べて非常に効率が悪い。経費を考えると、農耕を1とすれば最少のブタでも二倍、最大のウシで約二〇倍にもなる。つまり家畜飼育は経済効率としてはマイナスということである。このこともあって農耕文明が発展すると同時に牧畜は廃れてゆく。しかし牧畜は亡びることはなかった。なぜなら、穀物のタンパク質は体内においてナトリウム分(塩)がなければ分解吸収されないからである。つまり人間は穀物ばかりを食べ続けては生きていけないのである。そして、最も手頃な動物性タンパク質の供給源としてブタが脚光をあびるのである。

日本の豚に関しても様々な研究がある。弥生時代のブタの骨の分析を行い、臼歯のはえ具合からブタの年齢を測定し、半年から一歳の骨が大量にあることや、歯に歯槽膿漏の兆候があると診断し、家畜化された証拠として発表しているものもある。しかし詳しいことはまだわかっていない。最近では科学技術の発展が目覚しく、古代の骨をDNA鑑定する手法が取り入れられている。ブタに関しては名古屋大学大学院理学研究科が実験をすすめており、それによると弥生時代のブタは中国からやってきたものではなく、日本在来種(イノシシ)であるということである。三内丸山遺跡においても自然の栗か栽培された栗かを判断する方法としてDNA鑑定が使用されている。ただどちらも採集データが少ないという理由からまだ確定するまでには到っていない。

以上のようにブタひとつを取ってみてもその歴史は奥深く、それによって当時の環境が少しずつ明らかになってくるのである。

池が伝える中国史

中国史における環境史研究はまだはじまったばかりである。そして、それが二一世紀に本格的に展開するであろう新たな歴史研究のパースペクティブであることは誰もが認めるところであろう。中国(生態)環境史を“自ら”掲げる研究は日本においては上田信『森と緑の中国史』(岩波書店、一九九九年)、欧米においてはエルヴィン(Mark Elvin)の'Sediments of Time'(Cambridge University Press、一九九八年)がその端緒である。ただし、両者の環境史に対する視点はその述語において、異なることがすぐわかるはずである。前者は環境史を'ecological history'として、人間を生態系全体の中に組み込んで考える。後者は'environmental history'として、人間社会と環境との関わり方の歴史としてとらえている。この分類で言えば、今回の報告者である私の研究は後者の範疇に入る。これらの研究以後、中国環境史の研究はいまや活況を呈している。一九九九年には日本における中国古代環境史研究の先駆者である原宗子氏が編んだ『日中文化研究一四号—環境から考える東アジア農業』(勉誠出版)、『中国—社会と文化 一四号(シンポジウム「中国文明と環境」)』(中国社会科学会)、二〇〇〇年には深尾陽子ほか「黄土高原の村—音・空間・社会—」(古今書院)、妹尾達彦編『アジア遊学二〇 特集:黄土高原の自然環境と漢唐長安城』(勉誠出版)が出版され、時代や地域を越えた研究方法が提示されている。また、中国においては歴史地理学研究の基礎のもとにした環境史も発展し、史念海主編『漢唐長安与黄土高原』(一九九八年)・『漢唐長安与関中平原』(一九九九年、ともに陝西師範大学歴史地理研究所)などがある。中国環境史をテーマとしたシンポジウムも一九九九年には北京、二〇〇〇年にはつくばで開催され、二〇〇一年にはその成果が各々刊行される予定である。

環境史の問題とするテーマは多岐にわたり、対象とする地域や時代もバラエティに富んでいる。それゆえ、環境史とはどのようなものかと問われても即答することはできない。ただし、その問題意識が現在の環境問題や災害の来歴やその解決方法をさぐる作業のためのものであることは確かであろう。たとえば、「黄河の断流はなぜおきたのか?」「黄土高原に森林はあったのか?」「一九九八年長江大洪水の原因は何か?」などが問題意識のおおもととなっている。私の研究は自然環境に人間がどのように向き合ってきたかという歴史を復元することを目的としたものである。とくに、水を溜めた「池」と人間のかかわりかたを通してみている。それはまた、池の周囲に生育

する森林の歴史も包含する。池は人間の生活と密着しており、池の歴史は人々がどのように生活をつないできたかという歴史を知ることにもなる。池の機能を分類するならば?灌漑?天産物採取(養殖池)?防水害(遊水池)?都市水利の供給?生活用水?牧草地?庭園(観賞用)?塩池?工業用水の沈殿池などに分けられるだろう。報告ではスライドや地図を利用しながら日本古代の事例をも含めて紹介した。?では近年、東アジアに広く分布する敷葉工法(中国の安豊塘も同じ工法)を利用していることが確認された大阪狭山市の狭山池、?では中国安徽省寿県の安豊塘(芍陂)、?では陝西省西安の魚池、?では中国陝西省戸県の?陂、?では奈良県飛鳥京苑池遺跡、?では奈良県飛鳥池遺跡などの事例を挙げながら解説した。

また、池を軸とした中国古代の都市と環境の関係についての私の研究を紹介した。「中国古代関中平原の都市と環境—咸陽から長安へ—」(『史潮』新四六号、一九九九年)では戦国秦から統一秦・漢時代に現在の西安付近にある渭水の北から南へと都を遷すことと都市水利の関係を昆明池と呼ばれる池を中心に考察した。その際、都市水利の水源である昆明池の水土流出を防ぐため に、周囲の秦嶺山脈の山林を上林苑として保護したと考えた。「中国古代関中平原の水利開発と環境利用—鄭国渠から白渠・龍首渠へ—」(日中共同シンポジウム「中国黄土地帯の都市と生態環境史」報告、二〇〇〇年、於つくば国際会議場)では戦国秦から統一秦・漢時代における渭北平原の灌漑区域の変遷を鄭国渠から白渠・龍首渠へという過程の中から読み解いた。特に、塩池という環境の利用方法に着目し、戦国秦では鄭国渠により無理に塩池を耕地化したが、統一秦後には領土が東方大平原にまで拡大したため、白渠では塩害をひきおこす塩池を灌漑することなく、東方からの穀物供給に依ったことを指摘した。「中国古代淮南の都市と環境—寿春と芍陂—」(中国水利史研究会大会報告、二〇〇〇年、於神戸大学)では楚都寿春の都市水利とその南に建設された芍陂の機能の変化を論じた。明清以降の芍陂の縮小と一九九一年に発生した水害のランドサット衛星写真の分析から、当初、春秋時代には芍陂は寿春を守るための防水害機能が中心であったものが、後漢以降になると灌漑用途の比重が主流になると考察した。

最後にここ数年で私が清代地方志からかい集した「陂」とよばれる谷堰き止め型の池(谷池)の分布についての整理結果の一部を紹介した(なお、中国では皿池を「塘」と呼ぶ)。その数値は次のとおり。

[黄河上流域]寧夏 1 陝西 4 山西 0

[黄河中流域]河南 581(→陂の集中する江漢平原も含む。黄河流域は少ない)

[黄河下流域]山東 14 河北 11

[淮河中流域]安徽 1030

[長江中流域・江漢平原]湖北 256 湖南 521 江西 4211

[淮河・長江下流域]江蘇 23

[東南地区]浙江 218 福建 1844 広東 845

[西南地区]四川 1 雲南 3 貴州 1 広西 504

今回は数字の列挙にとどめたが、今後はい集した一万件以上の陂池データの履歴と地域性に関する分析を行い、人間と池との関係をより定量的に論ずることとした。

私が池にこだわってからまだ五年程度しか経過していないが、今後も環境史の中で「人と池の歴史」を探ってゆきたい。